

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	故郷の秋望 : 雑録
Author(s)	阿山生
Citation	龍南會雜誌, 49 : 14 - 19
Issue date	1896-10-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4554
Right	

雜 錄

故郷の秋望

阿 山 生

我は一日故郷の晚景を眺めんとて、夕陽將に西山の端に暮かんとする頃より、七才になる吾甥を携へつゝ、筈を郊外に曳きぬ。

時は好し恰も八月の既望、都にては尙、浴衣を着くる候なれど、田舎の秋色は早や稻の葉に登り、冷風颯々、涼しいはんよりは、寧ろ冷かなり。門を出つれば、前へに九州火山脈の一派たる阿蘇の五岳、今は夕立の雲霽れて、殊に晝間よりも歴々と見られぬ。西に峙つものは杵嶋岳、次に烏帽子を戴くが如きものは烏帽子岳、中央に蹲るは中岳、其左に方りて、最高峯をなすものは高岳、最東に聳え、宛も鋸齒の如き觀をなすハ猫岳にして、連山皆豊後の文珠山、涌蓋山等より其派脈を通ずるものにして、絶えず其頂より黒烟を吐きつゝあるなり。我が曩に歸省せし當時は、雷の如く鳴動えつゝありしが、又折々は其噴火口より、火焰を吐くことさへありて、

はのは見ゆ人の家にはあらぬかと窓推し見れば阿蘇の山あれ

ど、轟ぶれしこともありき。其焼え上るものは唯、烟焰のみに止まらず、時としては霾を降らして、里人を害することさへありつるも、皆里人の尊ぶ所にして、『壽安鎮國山』とまで稱へらる。

縷々として起る烟の、南に飄びく時は晴天を示し、黒焰北に靡く折は、降雨の前兆をあらはし、霜氣未だ凜々からぬ初冬の候には、早や雪を帯び、薫風縁を拂ふ晩春に至りても、猶ほ消えやらで、其高きを

証しつゝあるなり。

前岳後峰、左山右巒、脉々として吾四邊を繞る蘇岳の麓より、流れ出づる一條の谷川は、漠々たる平田の間を流れて、無限の恩澤を里人に與ふ。尙餘あればこそ、引かれては池溜の水となり、幾多の魚介を育て、或は無数の水車をも回はすめれ。雨降れば河身豊に、運び來る泥土の、田畑を埋めるは吾里のナイル川とも云ふべけれ。

暮色愈、近づけば、衆鳥高く飛び盡して、孤雲獨り去りて間なり、古寺の鐘聲林外に盡き、野渡の柳色、淡煙の中に蔽はれ、槭樹疎らに點綴する小堤の外、殘照微かに反映する閑谿の間に、孤村の遠影は見え又隠れ、丁々たる伐木の聲も、何時しか絶えて、薄暗き煙の幕は、小山の麓を掩ひ、彼方の森の小蔭に星かど見まがふ計りの、燈の幽かに閃くは、今しも里人の歸り來つるにやあらん、疇を争ひし小鳥も、小枝にとよぐ涼風にとれて、何時しか夢をや結びけん、靜まりて聲もなし。溪邊に釣する叟もどく歸り去りて、殘されし小舟のみ漣漪に弄ばるゝ計り。古き社の傍へより、犢の聲の聞ゆるは、秋草摘む童子の我家を指してぞ急ぐらむ。

一

飛ぶ鳥さへも歸り來て、
つれなき雲も早去りぬ。
夕日の影もたさまりて、
あづまの空に月は出ぬ。

二

かりはの稻の其田より、
かへる翁のかげも見つ。
野路の草葉の寝みより、
かへる牧人うたひつゝ。

見渡すかぎり秋のいろ、 てる月影もひとしほに。

隈なく渡ることがねいろ、 あなわれ老いん此里に。

眺むる程に晚烟はいや増して、吾莊院も其裡に埋むれぬ。『酔ふものは人の言を聞かず』とかや、我は今、田家の晚景に酔ひて、吾甥の『イヤ歸らん』と吾袖を引きしも、我は知らざりしなり。我は初めて酔より醒めたるものゝ如く、四方を見回すに、吾甥は早や見えぬなり。我は一聲二聲、彼が名を呼びつるに、遙に路頭の邊より、『此處よ』の一聲返へされつ。我は急ぎて彼を追ひしに、彼は最早、晚餉の頃なればとて、獨り歸りつゝありしなり。我は彼を擁して、『去來』と歸りぬれば、晝間の暑さに蒸されて蒸みしが如き草葉も、今は玲瓏たる白露を飾ぎして、水晶の珠を連ねたるが如く、裳に觸れてはバラりと落ちぬ。黄昏の煙もいつしか風に吹きやられて、堤の上に生ひ茂る老松の間より、一輪の明月皎々として輝き渡り、我を迎ふるものゝ如し。小川に沿ひて溯れば、蘆間を潜ぐる流水の、岩にせかれて響く音、嬌女が奏づる琴の調に似て、いとをかしく、草葉の蔭に熒々たる螢の、僅に夏の名残を留めつゝ、明日なき露の命を寄せぬるも、感應力の敏なる我ためには、又涙の種なりけり。『心學道歌』にも、
 假初の言の葉草に風立ちて露の此身のわざとこるなき
 と。元是れ一言の過も、莫大の禍となるを戒めたるものなれど、言外にも亦深き意あらすや。『方丈記』にも『行く川の流は絶えずして、而かも本の水にあらず。よそみに浮ぶうたかたは、且消え且結びて』とあり。慈鎮和尚も亦歌へり、

秋の始めになりぬれば、 今年も半ば過ぎにけり。

我世ふけゆく月かげの、
かたぶく見るこそ哀れなれ。

と、かことがましく、深草の裡に唧く虫の音を聞きても、唯吾身の上のみ引き當てらる。

十六夜の月、早や虧げぬと眺めても、芭蕉翁の『十六夜は僅に闇の始かな』をも思出たされ、哀を増すのみ。『古今集』にも、

露をなごあだなる物と思ひけん我身も草にねかぬばかりを。

誰か百歳の壽を保つと期せむや、謂ふ勿れ人生は五十と。孰か少者夭し、長者存し、強者歿し、病者全し、と謂はんや、人生は唯朝露に髣髴たるものを、若しや無常の嵐吹きもせば、なごか其老少を撰ばん『末の露も本のしづくや世の中の後れ先だつ始なるらん』とは、僧遍昭の至言なりける。我誤ちて智谷に陥いり、此悠久なる樂郷に、永く足を留むることを得ず、數日の後に去らざるべからざるを思ひては、轉た歸路に迷ひぬ。我は感じき、『數日の中に幽かき此處を立ち出で、浮世の空に迷ふなる、我が運命の如何許り拙さよ、せめて浮世の此郷にもがな。』と、流るゝものは唯川のみにはあらざりしなり。

彼方を眺むれば、晝間の稼に出で、在らざりし農家も、今は全く歸りつらん、彼方此方の疎林の間より、點々たる燈火も見られぬ。水村山郭、月下に静まり、時々吠ゆる遠犬の聲と、折々嘶く匹馬の音に静かなる谷間も、亦山彦を返しつ、一入凄氣を添へてけり。

偕も此幽谷の中に住する里人の、如何許り多幸なるよ。彼等の家には電燈なきも尙暗からず、時計なきも不自由を感せず、彼等の身には錦繡の美服なきも恥とせず、山海の珍味なきも飢とせず、規則なければ壓制さるゝこともなく、夜早く寝ねて朝疾く起き、息はんと欲する時に憩ひ、食はんと意ふ時

に食ひ、働かんと欲する時に働く。學ばざれば忘れもせず、罪てふものゝなければ、法律も何の用かは。都人の胸宇は一日に、幾度の陰晴を経つゝあるも、彼等の胸宇は、夕立の外、谷風の外、騒がざるなり。都人の多忙なる時に彼等は閑なり。涼笛の聲、電車の響は、都人の駕夢を破ふるも、彼等は夜半ばなる谷川の聲、但しは水巻く水車の響に、悠々とまて垂胷の郷に遊びつゝあるなり。都人が狂言に浮かれ出づる時、彼等は村女の手踊を觀て興じ、都人が葡萄の美酒に高樓に酔ふ時、彼等は手製の濁酒に、賤が伏屋に酔ひつゝあるなり。都人が洋琴を聞く時、彼等は自然が調ふる松風の音を聞きつゝあるなり。都人が悲ぶ時、彼等は喜びつゝあるなり。嗚呼、彼等は手から種えて自ら食ふ、日出で、耕し日入りて息ひ、井を掘りて飲む『帝力我に何か有らん』とは、此長閑なる山奥に住する彼等にあらざして、夫れ將た何れにかあらん。

人は謂ふ鄙は匿れ家なりと。然れども我思ふに、何ぞ必ずしも、競争場裡に失敗せし人にのみ限らん。凡て平和を愛する人、恩愛を思ふ人、徳義を重んずる人、但まは自然を愛する人、皆此里を羨むならめ。彼等の譏譽は一郷に止まり、彼等の褒貶は一村に限れるものを。尙彼等の四邊には、自然の恩愛溢れつゝあるものを。

雨降るも彼等の爲めには神の作用なり。雪降るも彼等の爲めには神の作用なり。四季の循環、寒暑の交代、晝夜の暝合も、彼等の爲めには神の作用なり。天氣朗らかなる夏の日、鳴き渡る蟬も、彼等の爲めに自然の音樂を調べつゝあるなり。秋半ばなる晴朗の朝に、草葉に宿れる白露も、彼等の爲に自然の『無常』を示しつゝあるなり。手から挿める早苗の、丈高くなりて、何時しか秋の風吹き初むるに至れば、穗に登りて下葉色づくに至るも、彼等は之を神の作用に歸す。太陽の東より出で、西に入る

も、之を神の作用に歸す。月の盈虧、潮の干満も、亦神の作用に歸す。凡て目に視、耳に聞く所、森羅萬象彼等は之を神の作用に歸せざるはなし、理學なく、化學なく、天文學なく、植物學なし。

とも彼等が云ふ所の神とは何ぞ『氏神』か『村神』か、否々然らず。目に見るべからず、耳に聞くべからず、手に捉ふべからざる玄妙不可思議なる、凡て彼等の『作用』をなす、而かも彼等の所謂天竺(上天の意)に在らず、最敬なる幽神あることを、彼等は暗に確信してあるなり。夫れ羅馬の府民は、パツリシアン、プレビアンなる二族に分かれ、世を終へ氏を交ふる迄、相軋轢せまことあるも、必竟するに、貧富の隔絶甚だしく、其國恩に浴すること差異ありしを以てなり。文理を解せし羅馬府民に於てすら、而かありしなり。

今吾郷は、長く敬ひ幼を扶け、緩急相救ひ、業を勵み義を重んじ、凡て平和を旨とし、一郷一村、上下隔絶なく、平等一様に君恩に浴しつゝあるなり。彼等忠君愛國の理は解せざるも、不知不識、帝の規に隨ひて、之が應用をなしつゝあるなり。學んで百惡を爲さんより、學ばずして一善を爲すに勝る幾許ぞ。彼等既に斯の如し、學ばざるも亦何の煩かある。あだし野の露、宵に結んで朝に消ゆるも、飛鳥川の淵は一日に幾度瀬になりつゝあるも、内地の雜居は何時行はるゝも、條約の改正は如何に結ばるゝも、此悠久なる山里に住む里人にありては、夫れ將た何の關する所ぞ。

東都の空は晴れ且つ曇るも、此山里は山長へに綠を帯びつゝあるにあらすや。我曩には都府を慕ひ、都人を羨みしも、今ぞ始めて吾故郷の天然古郷の樂園を愛する念を起しぬ。いざや此郷に、我も永く老いなん吾親しき父老と共に。